

# 新しいぶどう酒は 新しい革袋に



第2バチカン公会議後の奉獻生活と継続する課題



奉獻生活・使徒的生活会省  
2017

# 「新しいぶどう酒は新しい革袋に」

第2 バチカン公会議後の奉獻生活と  
継続する課題

## 指 針

奉獻生活・使徒的生活会省  
2017年

誰も新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。  
そんなことをすれば、  
ぶどう酒は革袋を引き裂き、ぶどう酒も革袋もだめになる。  
新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ！  
(マルコ 2・22)

## 目次

はじめに .....	5
第一部 新しいぶどう酒には新しい革袋を .....	7
イエスの「金言」(ロギオン) .....	7
公会議後の「刷新」 .....	10
問い掛けてくる新しい歩み .....	12
第二部 継続する課題 .....	17
召命と独自性 .....	17
養成上の選択 .....	19
「生身の人間」としての関係 .....	21
「男女間の相互関係」 .....	21
「権威者のつとめ」 .....	23
「关系的モデル」 .....	25
第三部 新しい革袋を準備すること .....	32
聖霊への忠実さ .....	32
養成モデルと養成担当者の養成 .....	34
福音的关系性に向かって .....	36
「相互性と多文化での作用」 .....	36
「権威者のつとめ：关系的モデル」 .....	38
「権威者のつとめ：集会議と顧問会」 .....	41
結び .....	46



## はじめに

奉獻生活・使徒的生活会省は2014年11月27日から30日に、「新しいぶどう酒は新しい革袋に。教会憲章と修道生活刷新教令から50年の奉獻生活」というテーマで省の全体会議を開きました。これは、その継続する課題を要約して、奉獻生活が公会議後の期間に歩んだ道なりに焦点を当てるものです。

この「指針」は全体会議中とそれに続く省察において浮かび上がり、そして「奉獻生活年」の期間中に、全世界からローマに、つまり聖ペトロの座のもとに集まった奉獻生活者の男女によって開かれた数多くの会合の後で作り上げられたものです。

第2バチカン公会議以降、教会の教導職は奉獻生活者の生活に常に寄り添ってきました。特に本省は、参照と価値の大きな座標軸を提供してきました：訓令「養成の指針」(*Potissimum Institutioni*: 1990年)、「共同体における兄弟的生活」(*La vita fraterna in comunita'*: 1994年)、「キリストからの再出発」(*Ripartire da Cristo*: 2002年)、「権威者のつとめと従順」(*Il servizio dell'autorita' e l'obbedienza. Faciem tuam*: 2008年)、そして「教会における信徒修道士の独自性と使命」(*Identita' e missione del Fratello religioso nella Chiesa*: 2015年)。

この「指針」は「福音的な識別」の訓練に位置づけられます。それは、聖霊に照らされて、歴史的状況自体において神が発する「呼びかけ」に気づくことです。「この歴史的状況の中で、またそれを通して」<sup>1</sup>、神は現代の奉獻生活者の男女を呼ばれるのです。それは「わたしたち皆が、その呼びかけにこたえるよう招かれています。つまり、自分にとって快適な場所から出て行って、福音の光を必要としている、隅に追いやられたすべての人にそれを届ける」<sup>2</sup> ためです。

それは教会的識別であり、それを通して奉獻者の男女は、理念と教義とが生活において現実となるために、新しい変革を経験するように呼ばれています。組織や構造、奉仕、様式、関係、そして言語について。教皇フランシスコはこの検証のための必要性を強調します：「現実には理念に勝ります [...] 現実とは単純明快なもので、理念は練り上げられるものです。両者の間には、つねに対話をもたれ、理念が現実から遊離することのないようにしなければなりません。ことばのみの世界、イメージのみの世界、詭弁のみの世界に生きるのは危険なことです」<sup>3</sup>。

公会議後に行われた広範囲で豊かな「刷新への適応」においてさえも、「決意と先

---

<sup>1</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勧告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 154。

<sup>2</sup> 「同上」、n. 20。

<sup>3</sup> 「同上」、n. 231。

見性をもって」<sup>4</sup> 対処しなければならない継続する課題に、奉獻生活者は直面しました。

識別の実行の観点から、この「指針」は、不十分な実践を見抜き、行き詰まった過程を指摘し、具体的な質問を投げかけ、奉獻生活者の福音的生活様式に与えられる現実的な支援のために、関係、統治、そして養成の構造に関しての質問を問いかけます。

これらは聖霊がその教会に与え続けている「新しいぶどう酒」を保つために作られた「革袋」を「率直に」試すための「指針」であり、短期的及び長期的な具体的行動を通して変化するよう駆り立てています。

---

<sup>4</sup> 「同上」、n. 58。

## 第一部 新しいぶどう酒には新しい革袋を

### イエスの「金言」(ロギオン)

1. 主イエスのひとつのことばが、現代の課題に直面し、第2バチカン公会議によって望まれた刷新の精神における、奉獻生活の旅路を照らすことができます。それは、「新しいぶどう酒は新しい革袋に」(マルコ 2・22)です。主からのこの知恵文学的表現は、共観福音書のすべてに収録され、イエスの公生活初期の文脈に置かれています。マルコ福音記者はこれを、イエスの自由でとらわれない行動の対極にある、カファルナウムのファリサイ派への最初の批判の中心に置いています(マルコ 2・18~22)。マタイはもう少し後の箇所はこの「金言」を配置し、イエスのことばと行動における慈しみが中心となる、預言者的職務を確かなものとする印章のように表示しています(マタイ 9・16~17)。ルカは古い思考方法と対話することの難しさを強調して、この挑発的言動をより詳細に表しています(ルカ 5・36~39)。この福音記者は、既に仕立てられた「新しい衣服」から切り取られた布切れ(マタイでは「織ったばかりの」布地)は、古いものを繕うためであると記しています。この稚拙な作業は、両方をだめにしてしまいます(ルカ 5・36)。これにルカはもう一つの警句を加えています:「誰も、古いぶどう酒を飲んだ後で、新しいぶどう酒を欲しがりはない。『古いものがより美味しい』と言うからである」(ルカ 5・39)。

三人の共観福音記者のすべてにとり、主イエスのやり方の新しさを強調することは重要でした。そのやり方とは、御父の慈しみに満ちた御顔をこの世に啓示しながら、慣習的な宗教的枠組みの単純な遵守から、批判的な距離を置きます。罪人を赦し、すべての人、そして放浪者をもご自分の苦しみの秘義に包み込むことは根源的な新しさです。この新しさは、すべてが既に予測され、枠にはめ込まれる、単調な繰り返しの図式に慣れた者たちを不安に陥れます。このような態度は、当惑を引き起こすだけでなく、疑いもなく、拒絶されることの動機となります。イエスが神の国を告げるやり方は、人々に新たな方法で、具体的な状況で話すことを許す「自由をもたらす律法」(ヤコブ 2・12 参照)に基づいています。このやり方は、「新しいぶどう酒」の色合いと香りのすべてをもっていますが、しかし、「古い革袋」を引き裂く危険を持ちます。このイメージは、制度的、宗教的、そして象徴的な形態が、つねに「柔軟性」を増していかなければならない必要性を明白に示しています。必要な柔軟性なしには、どのような制度的形態も、どれほど尊敬すべきものであっても、生活からの緊張に耐えることや、歴史からの要求に応えることもできません。

2. 主・イエスによって使用された「たとえ」による表現も、それが単純なものであればあるほど、要求度も高いものです。短い「たとえ話」における革袋は、柔らかい皮革で作られた入れ物で、まだ若いぶどう酒が発酵し続けるのを許容するほど膨張できるものです。しかしながら、もし長期にわたって使い古され、乾いて堅くなってしまっていたら、もはや革袋は新しいぶどう酒の活発な圧力に耐えるために必要な柔軟性を持たないでしょう。かくして破れてしまい、ぶどう酒と革袋の両方の損失となります。ヨハネ福音記者は、同じ「たとえ」をカナの婚宴で提供された「良いぶどう酒」(ヨハネ 2・10)として、喜びに満ち、澁刺とした福音の宣布の預言的新しさを示すために使用しています。「良いぶどう酒」と「新しいぶどう酒」は、このようにイエスの行動と教えの象徴となり、それは新しい契約に対して自分を開くことのできない、世俗化した宗教的枠組みという古い革袋には留め得ないものです。ルカ福音記者が「より美味しい」古いぶどう酒について語るとき、確かにファリサイ派と民の指導者たちが、過去に対する平準化され、頑なになった形式に固執していることに言及しています。しかし、おそらく、それがすべてではないでしょう。第2世代のキリスト者自身でさえ、福音の新しさに、完全には開かれていない傾向に対処しなければならなかったのです。固有の確実性と慣習に閉じこもった世界の、古い様式に戻ろうとする誘惑に陥る危険が、常に潜んでいました。回心に伴う絶えざる挑戦を避けるため、自身を戦略的に適合させようとの誘惑は、教会の歴史の当初から存在してきました。

主イエスのことばはわたしたちに、受容だけでなく識別を要求する、ある種の新しさからの挑戦を受けるのを助けます。わたしたちは、福音の革新的な豊かさを保つのに本当に適した構造を創り出さなければなりません。それは福音の質と善さを保ちながら、すべての人に経験され、益となるためです。正しく熟成し、ついには味わわれ、分け与えられることができるために、「新しいぶどう酒」には、革袋の内で呼吸するかのように発酵する余地が残されなければなりません。同じことが、衣服とつぎあてのイメージに当てはまります。破れた衣服につぎあてするために、新しい衣服から布を切り取ることはできません。そんなことをすれば、新しいつぎあては古い衣服をずたずたに引き裂いてしまい、ついには何の役にも立たなくなります。

3. 福音のメッセージは、単なる社会学的なものに貶められることはできません。むしろそれは、常に新しい霊的な導きです。それは、預言的でカリスマ的で、ふさわしく、おそらく未だ公開されていない枠組みにおいて生きられる、(キリストに)「従うこと」の様式をイメージするための精神的な開きを要求します。すべて、過去において既に検証された枠組みの外で生きられる一連の革新的な奉仕であり、必然的に新しい制度的構造にも受け入れられるはずのものです。これらの構造は、期待や挑戦の高

さに実際に見合うものでなければなりません。心構えの他に、構造にも影響を与え、変化させることのできないような刷新といったものは、現実的で永続する変化をもたらさないでしょう。ほんのわずかの押しつけであっても、たとえそれがどれほど寛容なものであっても、拒絶をもたらす得ることを常に心に留めなければなりません。拒絶は、不可避的な新しさからの刺激を失うことを意味します。その新しさとは、認知されるだけでなく、完全に経験されること、そして確かに単に耐えたり受容したりするだけでなく、徹底的に生きられることを要求するのです。

この福音的基準を、第2バチカン公会議の恵みの時に教会の内部で経験されたことに当てはめてみると、わたしたちは本当に「新しいぶどう酒」について語ることができます。聖霊の導きのもと、教会は主のぶどう畑として、すべての者の貢献と寛大さによって、刷新された霊的収穫を経験することができました。わたしたちは皆、刷新の生き生きとした体験に喜ぶことができたのです。それは新しい要理教育の過程、聖性と兄弟的生活の刷新されたモデル、刷新された統治構造、これまでにない神学的流れ、連帯と奉仕のこれまでにない形態などに表れたものです。豊かで喜びに溢れた感謝の念を持って感じ取ることができる真の収穫でした。にもかかわらず、これらの刷新のしるしと変化の形態のすべては、これもまた常のこととして、かつて神聖視され、形骸化した古い慣習と同居したのです。抵抗させるのは、この常に変化する刷新を現実に対応することへの彼らの頑なさや無能力からの慣習です。この生活様式の混在から、とげとげしいまでの争いが生じるのです。互いの批判の応酬という争いからは、「最上のぶどう酒」(雅歌 7・10) となることはなく、「泡だつた苦いぶどう酒」(詩編 75・9) に腐敗してしまうだけです。ずっと昔から定められ、試されてきた事柄に十分忠実でなかったことから、他者を「酸っぱいぶどう」(イザヤ 5・2 参照) のように裁く者まで出てきました。これらのすべてを前にして、ショックを受けることも、ましてや落胆することもあります。長い時間をかけた作業や、途中での不可避的な事故を計算に入れずに、現実的な刷新のための適切な構造をうまくまとめることはできません。真正で長続きする変化は、決して自動的には行われません。

通常、これらの変化は、すべての範囲の抵抗や、いくらかの退歩をも考慮に入れなければなりません。これらの抵抗が、常に悪意や不誠実さからとは限らないことも知る必要があります。第2バチカン公会議の閉幕から 50 年以上経過し、決して痛みがないわけではない聖霊による活気づけによって、落ち着きを失い、不安になっていることを心に留めなければなりません。これは確かに、時のしるしと聖霊の息吹への応答から見て、時期による多少の差はあれ、実り豊かであった奉獻生活に当てはまりません。

## 公会議後の「刷新」

4. 前を見つめ、公会議によって望まれた刷新の精神で歩み続けるために、少し歴史を振り返ることは、すべての人の歩みを照らし、固めることに有用です。この半世紀にわたしたちが経験したことを意識することは、わたしたちに向けられた教皇フランシスコのことばと姿勢からの励ましを受け容れようとするなら、より一層必要なこととなります。

「今日の要請にこたえた」<sup>5</sup> 奉献生活会の生活と規律の「適切な刷新」は、第2バチカン公会議による明白な要請です。公会議教父たちは、この刷新のための神学的・教会論的根拠を、特に「教会憲章」の第四章<sup>6</sup>に置きました。「修道生活の刷新・適応に関する教令」では、教会における奉献生活の霊性、教会性、カリスマ及び制度面の「現代化」のための、より適切な指示と実践的な指導を提供しました。他の公会議文書では、「典礼憲章」と「宣教活動教令」においてのみ、修道生活に何らかの意義のある実践的な示唆がなされました。

半世紀後、公会議の「精神」から派生した影響が、格別に豊かであったと、わたしたちは満足感をもって認めることができます。全員が関わる識別と積極的な配慮の「やり方」は、「現代化」に対して大きな効果を上げる弾みと方法を生み出しました。この深い変化の最初の一步は、奉献生活が自己を再理解しなければならないのと同じ方法で、自己を吟味することでした。公会議前の段階において奉献生活は、そのすべての表出と構造において、この世に対して常に抵抗するものと自覚した、闘う教会の生活と使命のために一致団結し、機動的な戦力を代表していました。この世に開かれ、この世との対話の時節において奉献生活は、教会全体のために、教会と世界の新しい関係の座標軸を探る第一線に押し出されたと感じています。これは聖ヨハネ 23 世によって告げられた、第2バチカン公会議の最も示唆に富み、変容させるテーマの一つです。この対話と受容の路線において奉献生活は、もちろん常にではなくとも、開きと傾聴と奉仕の新しい冒険のリスクを進んで受けとめたのです。信頼に特徴づけられた現代世界との関係と存在の様式を実際に具体化することができるために、奉献生活は新しい道が持つリスクに身をさらし、思い切って舵を取りながら、その多様なカリスマとその霊的遺産を賭けました。

5. 公会議の出来事からのこの 50 年間、すべての奉献生活会が第2バチカン公会

<sup>5</sup> 第2バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 1。

<sup>6</sup> 第2バチカン公会議、「教会憲章」、nn. 43~47。

議の要求に応じるために、その最善の努力を払ってきたと記すことができます。特に公会議後の初めの 30 年間には、刷新の努力がかなり大幅に、創造的に行われ、その後の 20 年間にもペースを落とし、少々疲れた様子ではあっても、続行されました。規範の文言や制度の形態が再度検討され、当初は公会議からの促しへの応答として、その後は新しい「カトリック教会法典」(1983 年)の規定に適合させるためになされました。各修道家族では、「会の原初の精神」<sup>7</sup>を再度読み取ることと解釈することに大きな努力が払われました。この作業には主に二つの目的がありました。「創立者の意向と計画」<sup>8</sup>を忠実に守ることと、「現代世界に現れている時のしるしに答えて、自分たちの創立者の意欲的な取り組み、創造性や聖性を、勇気をもって再び提起する」<sup>9</sup>ことです。

独自性や生活様式、それぞれの教会的使命を見直す大きな努力の成果は、それぞれの修道家族の性格やカリスマに適した、新しい養成過程への勇気と忍耐力による探求にも伴われました。統治構造、経済資産や活動運営の多くの面においても、「今日における会員の身体的・心理的状况に、[...]また使徒職の必要性、文化の要請、社会的・経済的な状況」<sup>10</sup>に適応しました。

6. この 50 年間の歴史を簡単に振り返った後、わたしたちは、奉獻生活が探検者の熱情と大胆さをもって、公会議が切り開いた地平に住むために行動してきたと慎ましく認めることができます。たどってきたこの歩みのすべてに対して、誠実に真心から、神と互いに対して感謝しなければなりません。

この惜しみなく骨の折れる歩みにおいて、この何十年間、諸教皇の最高教導職から大きな助けが送られてきました。さまざまな性格の文書や声明によって教皇たちは、新たな確信を固め、新たな道を識別し、知恵と教会的感覚によって、聖霊からの訴えかけに常に耳を傾けながら、存在する土地と奉仕の新たな選択を方向付けることをきまって助けてくれました。世界代表司教会議後の使徒的勧告：「奉獻生活」(1996 年)は、神学的・教会論的、そして方向付けにおいて、非常に価値のある文書と見なされるべきです。そこでは公会議後の「現代化」のより良い成果が集められ、確認されています。

特に使徒的勧告：「奉獻生活」は、至聖三位一体の秘義の観想と源泉としての言及を輝かせています。「奉獻生活は、御父が御子をとおして聖霊において、その愛、その

---

<sup>7</sup> 第 2 バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 2。

<sup>8</sup> 教会法 第 578 条。

<sup>9</sup> 教皇ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告：「奉獻生活」、1996 年 3 月 25 日、n. 37。

<sup>10</sup> 第 2 バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 3。

優しさ、その美をもって何をなさるかを告げます。事実、『修道身分は、[...] あらゆる地上的なものを越える神の国の卓越性とその最大の要求とを特別な方法で明らかにし、王であるキリストの力の卓越した偉大さと教会の中ですばらしい方法で働く聖霊の無限の力とを、すべての人に示します』。[...] 奉獻生活はこのように、聖三位が実生活に刻印した、分かり易い印章の一つとなります。それは人々が憧れをもって神的美しさへの魅力を感じることができるためです<sup>11</sup>。奉獻生活は、兄弟的生活の課題に取り組むことにおいてさえも、「三位一体的信仰告白」となり、そこでは「兄弟的な生活でさえも、そこで奉獻生活者は『心も思いも一つにして』（使徒 4・32）キリストにおいて生きようと努めます<sup>12</sup>。このような三位一体的観点から、一致への大きな課題と、祈りのエキュメニズム、証し、殉教の必要性が、男女の奉獻生活者にとっての王道として浮かび上がります。「弟子たちが一つになるように（ヨハネ 17・21～23 参照）という、受難を前にしたキリストの御父に対する祈りは、教会の祈りと行動のうちに生き続けています。奉獻生活に召された人々が、自分たちもそれに含まれると、どうして感じないでいられるのでしょうか？」<sup>13</sup>。

本省が提供した、細部にわたる学識豊かな指導も、さまざまな手段、「訓令」、「書簡」、「命令」と、定期的な監査、いくつかの指導原則によって、奉獻生活の独自性と教会的使命に、全員が関わる識別と預言者の大胆さをもって、公会議による「現代化」に正統性を保ちながら、それに忠実に留まるためです。

しかしこれは、もろさや苦勞の否定を意味するものではありません。それらは認識され、見極められなければなりません。それは、わたしたちが引き受けなければならない歩みを継続するだけでなく、忠実さと創造性の観点から、さらに徹底させていけるためです。同様に、奉獻生活が自己の力を試し、具現するように召された新しい状況に、現実主義において直面する必要があります。

## 問い掛けてくる新しい歩み

7. 最近数十年間に奉獻生活が実践してきた「奉仕」の豊かな多様性は、社会・経済・科学そして技術の進歩によって、根本的な再構成を迫られました。同様に、多くの分野において、歴史的には典型的に修道者によるものであった事業への、国家の介入があります。これらのすべては修道者に、その生活する全体的状況と、関係する様

---

<sup>11</sup> 教皇ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告：「奉獻生活」、1996 年 3 月 25 日、n. 20。

<sup>12</sup> 「同上」、n. 21。

<sup>13</sup> 「同上」、n. 100。

式と、他者との相互交流の通常の方法を変えさせました。その間に、新しく派生した、これまでにない緊急事態が、他の必要を突発させました。これらには今もなお応えるすべがなく、奉獻生活のすべての形態に対して、その創造的忠実さに援助を求めています。

新しい貧困が多くの奉獻生活者の良心に問いを投げかけ、歴史の新しい状況と、新たに捨てられた者たちを前にした、新しい形態の貧困に惜しみなく応答するよう、周知のカリスマを急ぎ立てています。ここから、多様な生活の辺境における、存在と奉仕の新しい形態が開花します。忘れてならないのは、ボランティア活動の激増です。それには、信徒も修道者も、男性も女性も、「使徒職の新しい経験」<sup>14</sup> に富む協力関係といったものに関わっています。こうして「さまざまな賜物を結集して、現代の大きな課題への教会の応答をいっそう効果的にすることに寄与しています」<sup>15</sup>。洗礼による共通の基礎の再発見に基づく同じような調和が、キリストのすべての弟子を結びつけ、この世界をより美しく、すべての者にとってより生きやすいものにするために力と発想を結集しようとするものです。

多くの活動修道会が、とりわけ女性の修道会が、若い教会における設立を最重要課題とし始め、ほとんど全くの「単一文化性」の状況から、「多文化性」への挑戦に移行しました。この意気込みにおいて、国際的共同体が構成され、それはいくつかの修道会にとって、元来の地理的・文化的境界から踏み出す初めての大胆な経験を示すものとなりました。それまで知ることのなかった奉仕や、多宗教が共存する状況への経験にも送られました。新しい共同体が困難な環境に、しばしばさまざまな形態の暴力の危険を冒して入り込みました。これらの経験は、修道家族の内部に分ち合う文化的「慣習」として、また、革新的な教会の形や霊性の様式として、大きな変化をもたらしました。こうした移行は当然、新しい召命や新しい状況に不適切な、伝統的養成の枠組みを危機に陥れました。確かに、すべては偉大な豊かさですが、一方、さまざまな緊張を生み、とりわけ、宣教経験の少なかった活動修道会においては、時折、争いにまで至りました。

8. 社会と文化における現代の発展は、予想外に急速で混沌とした、広範囲にわたる変化の様相を示し、奉獻生活にさえも、調整のための絶え間ない課題を突きつけました。これは絶えず新しい応答を求め、歴史に育まれてきた基本構想や、カリスマ的側面の危機を伴いました。この危機のしるしは、明白な疲労です。いくつかの場合、まさに通常の管理（「マネジメント」）から、賢明に行動する必要のある新しい現実

---

<sup>14</sup> 「同上」、n. 55。

<sup>15</sup> 「同上」、n. 54。

の高さでの指導に移行する能力が無いことを、思い知らされました。良く知った現実を単純に管理することから、真の信頼を生じさせる確信を持って、目標と理念に向けて導くことに飛躍するのは、簡単な仕事ではありません。これは単に生き残りの戦略に集中することでは十分ではなく、教皇フランシスコが絶えず思い起こさせるように、経過を発表する当然の自由を必要とします。とりわけ、協力関係の活力を養いながら現実的な合議制を促すことができる指導のつとめが、より一層必要とされます。このような目標の共有においてのみ、忍耐と賢明さと先見の明をもった移行を担うことが可能となるでしょう。

現今のいくつかの困難は、奉獻生活とその修道会を、ますます複雑に、そして機能不全にさせています。状況の変化は、奉獻生活を混乱させる危険を増加させ、見通しをもった生活ではなく、緊急事態に生きるよう強いています。時折、奉獻生活がほとんど完全に、日々の運営や、単なる生き残りのための営業に終始しているように見えます。現実直面する同様のやり方は、意義に満ち、預言者的に証しする能力のある生活を損なっています。

緊急事態を絶えず管理することは、人が考えるよりもエネルギーを消耗させるものです。残念ながら危険は、進路について考えることよりも、問題を食い止めるために完全に心を奪われてしまうことにあります。このような悩みの多い労苦において、公会議のカリスマ的な衝撃力は、失われたかのような印象を与えます。刷新と創造性に大きく関わろうとする、まさに新しい移住を大胆に受け入れようとしている時に、近年の出口のない停滞がやって来ました。多くの場合、将来への恐れによって、奉獻生活が全人類の善のために教会において実践するよう召されているその預言者的奉仕が弱められ、活力を奪われてしまいました。これを教皇フランシスコが主張しています<sup>16</sup>。

9. 歩みのこの地点において、公会議後の長期にわたる刷新の産物である「新しいぶどう酒」の、熟成の質と度合いを識別するために立ち止まってみるのは礼儀でもあり、必要でもあります。いくつかの問いが浮かびます。最初のもは、構造、組織、役割、様式など、かなり以前から存在してきたものと、近年、公会議の指示に応えるために導入されたものです<sup>17</sup>。二番目のものは、今日奉獻生活で使われている上述の仲介要素が、「新しいぶどう酒」のように発酵し沸き立つ、より明白で支持すべき新しさと、その十分な安定性に向かう必然的な移行を受け入れるために、適切であるか

---

<sup>16</sup> 教皇フランシスコ、使徒的書簡：「奉獻生活者年にあたり、すべての奉獻生活者に」、2014年11月21日。

<sup>17</sup> 第2バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、nn. 2~4 参照。

どうかを評価するよう導きます。最後に、わたしたちが飲むように提供し、味わうものが本当に「新しいぶどう酒」で、こくがあり、健康にも良いものなのか？と自問することができます。それとも、すべての良い意向と称賛すべき努力にもかかわらず、下手に刈り込まれたぶどうの木、出来損ないの収穫に対処するために、水で薄めた酸っぱいぶどう酒を扱っているのでしょうか？

これらの質問は、わたしたちがそれ以上問い詰めるのを妨げてしまう罪の意識に陥ることなく、単純さをもって「率直に」発することができます。わたしたちの奉献生活という「革袋」の内部で、何が生じ始めているかを一緒に見つめるために、少し時間をとることができるでしょう。これは「新しいぶどう酒」と「良いぶどう酒」の質の要点を見定めることで、過ちを指摘することや非難することではありません。わたしたちが慈愛に満ちた管理人であるこのぶどう酒を、わたしたちはすべての人、とりわけ最も貧しい人々と最も小さな人々の喜びのために注ぐよう召されています。

一連の変革の全てにもかかわらず、古い制度的規範が、容易には新しい様式に決定的な方法では道を譲らないのを知っていても、恐れるべきではありません。わたしたちが慣れ親しんできた用語法や様式、価値や義務、霊性や教会的独自性のすべては、まだ公会議後の息吹と実践から生まれてきた新しい考え方の枠組みの試行と安定化のために場を譲っていません。教会内において、また歴史に照らして、奉献生活の遺産と独自性を構成するすべてを再検討するという、必要でありながら忍耐力を要する局面に、わたしたちは生きています。同様にまた、頑固に、形跡に沿って残り、今や明白な形で多くの文脈に巧みに隠された欲求不満の感情に応え得るものとして、再び姿を現した抵抗を指摘し、読み取らなければなりません。奉献生活のいくつかの現実においては、時折、人数や利用可能な手段の観点から、しるしを新たに受け入れることに不能であることさえ明らかとなりました。「古い」ぶどう酒の味に慣れた者は、既に実証済みの様式に安心させられて、それが実質的に取るに足りないものでない限り、実際にはいささかの変更に対しても応じません。

10. 現時点で奉献生活が置かれている状況を紹介し、分かち合った後、いくつかの矛盾と抵抗を紹介しようと思います。この種の分かち合いは、真実性と誠実さをもって提供するつもりです。機能不全から抜け出し、将来に対する不安を克服するために、解決すべき問題の糸口がどこにあるのかを一緒に理解する宿題を、もう後回しにすることはできません。奉献生活の預言に固有の成長と刷新のダイナミズムを、何が停滞させているかを探し出すことの他に、恐れや怠慢に囚われたままにとどまらないための、いくつかの方向付けを与えるのが適当であると思われます。この意味で、養成の過程や、さらに進むために必要な法的注意点についてのいくつかの施策、そして権威

の奉仕職が兄弟的生活にとって本当の交わりの様式のつとめとなるためのいくつかの助言を提供するよう模索しましょう。さらに、奉獻生活にとって微妙な他の二つの分野、養成と財の共有に、特別な注意を払うことが必要であると思われます。

すべての歩みの土台として、奉獻された男女にとり、御国に奉仕するための福音への新たな熱情の突き動かしなしには考えられない、新しい聖性の衝撃の必要性を強調しておく必要があると思われます。この歩みに向けて、教会にその靈感によって語り続けられる復活された方の霊がわたしたちを動かします。

教皇フランシスコはこの行程を肯定します。「新しいぶどう酒には、新しい革袋を。福音の新鮮さを。福音はわたしたちに何をもちますか？ 喜びと新鮮さです。新しいことの新鮮さです。新しいぶどう酒には、新しい革袋を。そして、福音の掟に従って物事を変えることに不安を抱かないことです。そして、このことを通して教会はわたしたちに、わたしたちのすべてに、いくつかの変化を求めています。わたしたちに、はかない構造を放っておくことを求めています。それは役に立ちません！ そして新しい革袋、つまり福音によるものに取り替えることです。福音は新鮮さです！ 福音は祝宴です！ 人は喜びに溢れた心、新たにされた心においてのみ、福音を完全に生きることができます。真の幸いの掟、喜びと自由は、福音の新鮮さがわたしたちにもたらす場です。主はわたしたちに、囚人に留まらないという恵みだけでなく、福音の新鮮さがわたしたちにもたらす、喜びと自由の恵みを与えてくださいます」<sup>18</sup>。

---

<sup>18</sup> 教皇フランシスコ、「朝の瞑想」、ローマ、聖マルタ教会礼拝堂にて、2014年9月5日。

## 第二部 継続する課題

11. イエスが語る変化への抵抗、すなわち、なぜなら「古いものは美味しい」から（ルカ 5・39 参照）という論理は、すべての人間的活動と文化的体系で検証される現象です。福音が、良い種と毒麦のたとえ（マタイ 13・25～30）や、「良い魚と悪い魚」で一杯になった網（マタイ 13・47～48）で教えるように、しばしば善いわざに、他のそれほど善くないものが混じります。これが驚きでない以上、真正で信頼できるあかしに必要な過程を妨げる、わたしたちの限界と脆弱さを認知するために、絶えず注意を払っていなければなりません。

一度安定した体系はというものは、変化に対して抵抗する傾向があり、自己の立場を維持するために、しばしば都合の悪い事柄を隠したり、他の場合には、古いものと新しいものとの区別をつかなくし、あるいは、見せかけの一致の名の下に、現実や対立を否定し、あるいは、表面上の調整によって、本来の目的を隠したりもします。残念ながら、然るべき回心なしの、単に形式上の同意に出会うような例に事欠くことはありません。

### 召命と独自性

12. 健全な現実主義によって、まず初めに、奉獻生活を放棄した者の数が、依然として多いことを明らかにしなければなりません。重要なのは、これらの放棄の主要原因に光を当てることで、養成過程の主要な段階（誓願、叙階）を終えた後と、高齢となってからのものです。この現象は、今ではすべての文化圏や地域圏でも報告されています。

情緒的な危機だけが常に主要原因ではないことを明らかにしておかなければなりません。しばしば、このような情緒的な危機は、真正さを持たない共同体生活への幻滅を遠因とします。価値の面から提示されたことと、具体的な生活で示されることとの落差は、信仰の危機にまで導き得ます。押しつけ、緊急性を誇張し、多すぎる活動は、忠実さへの願望を養い励ますことのできる、確固とした靈的生活を可能にしません。いくつかの場合、新しい福音化によって要請される靈性や祈り、司牧活動の様式に移ることが困難な年配者が支配的な共同体での、より若いメンバーの孤立は、生活の現実的約束への希望を衰弱させる危険にさらします。このような挫折は、しばしば召命の放棄を、死なないための唯一の選択肢として示します。

社会学的研究は、若者たちの間に、彼らが喜んで真剣に関わろうとする純粋な価値への熱望が欠けているわけではないことを示しました。若い人たちにおいて、超越者に仕える用意、そして連帯、正義、自由のために熱中する能力が見られます。奉獻生活は、あまりにもしばしば、文化的脈絡の外にあるその画一化された様式と業務の運営のための過度の不安から、若い人たちの最も深い願望を汲まない可能性があります。これは世代間の交流をますます難しくする空洞を創り出し、必要な世代間の対話をあまりにも困難にしています。

このためわたしたちは、真剣に養成体系について自問しなければなりません。確かに近年、わたしたちは積極的で正しい方向にも変化を示しました。しかしそれは、断続的であり、養成を支える根本的な構造を修正するには至りません。養成に注がれたすべての努力や関わりにもかかわらず、人々の心に触れ、それを実際に変容させるまでには至っていません。養成が実行に移されるためのものであるよりは、情報を提供するもののような印象を与えています。結果として、人々は本質的な確信においても、信仰の旅路においても、脆弱なままに残ってしまいます。これは心理学的及び霊的な度量を最小限にしか育まず、したがって、文化との対話や社会及び教会に溶け込むことにおいて、自己の使命を惜しみなく、また大胆に生きることへの無能力に導きます。

13. 多くの修道会における最近の進展は、異なる文化間の統合の問題をさらに先鋭化しています。いくつかの修道会では、運営の難しい状況が既にくっきりと浮かび上がっています。一方では、何十人かの年配の会員があり、文化的・古典修道院的で、時折修正された伝統に縛られています。他方では、異なる文化からやってきた無数の若い会員の群れがあり、これらは疎外されていると感じ、怒りに震えて、もはや従属的な役割を受け入れません。屈従の状況から脱するために責任ある立場を手に入れたいと望みは、意志決定する立場の者への圧力団体の形を取らせるかもしれない。ここから福音の文化受容という、放棄し得ない過程を危機に陥れる可能性がある、苦しみと疎外、無理解とこじつけの経験が生じるのです。

文化受容のこの労苦は、奉獻生活とその画一化された形式について考える古典的な方法と、これとは異なり、浮かび上がってきた教會的・文化的背景において感知され、切望された方法との増大する距離を暴露します。とてつもないグローバリゼーションと平行しているように思える、奉獻生活の非西洋化あるいは非欧州化の過程を心に留める必要があります。最も重要なのは形式の保存ではなく、創造的な継続性において奉獻生活を、そこから洞察と具体的選択が湧き出る回心を行う永続的身分の福音的記憶として再考するための余裕であることが、ますます明白になりま

す。

## 養成上の選択

14. この分野において諸修道会は、国内および国際規模のさまざまな上級上長協議会からの助けもあって、かなりの努力を払いました。これらのすべての仕事にもかかわらず、養成の概念や養成モデル、教育方法における神学的理解と人間学的理解との統合は、わずかしか認められません。これは単なる理論上の問題ではありません。というのも、このような統合の乏しさは、これらの成長の歩みにとって本質的で不可欠の二つの構成要素、霊的次元と人間的次元が相互作用を及ぼし、話し合うことを許さないからです。これら二つの次元が、補完的で調和的な方法で配慮されずに自律的に進展していくとは、もはや考えられません。

霊的次元と人間的次元の調和的成長のための配慮は、さまざまな文化特有の人間理解と、特に生活の新しい文脈に関して、新しい世代固有の感受性への注意を含みます。新しい世代の心に真に触れる象徴についての深い理解だけが、単に表面的なことや流行していること、ファッションに至るまで、独自性の確かさを与えるかのような外的しるしを求めることへの執着で満足してしまう危険を避けることができます。さまざまな文化圏、大陸圏への格別な注意を払って、召命の動機を識別する必要が急務となっています<sup>19</sup>。

15. 近年、すべての修道会が固有の「養成綱領」を備えたにもかかわらず、養成過程への適用は、しばしばその場しのぎとなって、その価値を減らしてきました。とりわけ女性の修道会に起こったのは、実り多く、組織だって体系的な養成の歩みに、事業の緊急性があまりにもしばしば優先してしまうことです。共同体の現行の生活を運営するための事業や任務からのプレッシャーは、公会議直後に進んだ歩みに対して、有害な退歩を生じさせる危険をもたらしました。

このような概観において、奉献生活へのバランスのとれた養成を守りながら、神学課程の一貫性のない履修や、専門学位課程の専一的な履修などは避けるべきでしょう。実際、危険の一つとして、それぞれが分かち合いへのどのような要請に対しても用心深く閉じ籠もり、他者を立ち入らせない世界を作り上げるといったことがあります。同様に、近い将来に学位を取得する若い奉献生活者だけを有する必要は

---

<sup>19</sup> 奉献・生活会省、「キリストからの再出発。第三千年期における奉献生活の刷新」、2002年3月19日、n. 19参照。

なく、「キリストに従う」生活への価値を見定めることを養成すべきでしょう。

16. 多くの修道会で、養成の任務に適した準備を持つ人材に欠けています。これは、かなり広範囲に見られる不足で、とりわけ、他の大陸にまで存在を広げてしまった小さな修道会に起きています。養成は即席には行えず、はるか以前からの継続的な準備を必要とすることを、わたしたちは常に念頭に置いておかなければなりません。養成担当者へのしっかりとした養成なしには、また、このつとめに本当に準備され、委ねることのできる兄弟姉妹でなければ、より若い人たちに実際的で期待のできる同伴といったものは不可能でしょう。養成が効果的となるには、しっかりとした人格的教育法に基づき、すべての価値、霊性、時代、様式、方法について、変わり栄えのしない提案にとどめないことです。わたしたちは養成の個人指導化の課題に直面しています。そこでは師から弟子に直に伝授されるモデルが実際に取り戻されます。伝授には、師と弟子との接触、信頼と期待のうちに肩を並べて歩むことが要請されます。

この文脈において、養成担当者男女の選択に、大きな注意を払う必要性が再確認されます。これらの養成担当者は、主要な使命として、彼らに託された人々に「キリストの後に従うことのすばらしさと、それを達成させるカリスマの重みを明らかに」<sup>20</sup> します。養成の担当者に要求されるのは、彼らが「神を探求する道を熟知する人」<sup>21</sup> であることです。

あまりにもしばしば、若い人々が未熟なままに、重く苛酷なやり方で事業の運営に巻き込まれ、誠実な養成の遂行がかなり難しくされています。誠実な養成は、より若い人々の養成を直接託されている者だけに、あたかもこの者だけの問題であるかのように、委ねられることができず、「共同で生活する労苦と喜びへの手ほどきが〔…〕行われる」<sup>22</sup> 場である共同体全体による、協働と釣り合いの取れた存在を必要とします。他者を神からの賜物として、その積極的な特質を、相違や限界と共に受け入れるのを学ぶのは、兄弟共同体においてです。すべての者を築き上げるために、受けた賜物を分かち合うのを習得するのは、兄弟共同体においてです。奉獻の宣教的次元を習得するのは、兄弟共同体においてです<sup>23</sup>。

継続養成については、語る事が多く、実行することが少ないという危険があります。神学の原理的な情報や、霊性のテーマを扱うコースを組織するだけでは十分

---

<sup>20</sup> 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告：「奉獻生活」、1996年3月25日、n. 66。

<sup>21</sup> 「同上」。

<sup>22</sup> 「同上」、n. 67。

<sup>23</sup> 「同上」、参照。

ではなく、生涯養成の文化といったものを形成するのが急がれています。この文化には、原理的な概念を語るだけでなく、共同体において具体的に経験されたことを見直し、確認する能力も属しています。さらに、生涯養成を反省と見直しの機会として、修道会発祥の地を訪問することで満足する、観光の一種と取り違えてはなりません。さらに、あたかも養成が、生涯のさまざまな時期における忠実さの活力を養うための内在的要請からのものでないかのように、養成の機会を特別でまれな行事（修道会の思い出の記念式典、誓願 25 周年または 50 周年のための祝い）に分類してしまう危険が見られます<sup>24</sup>。

継続養成の中に、統治への真剣な手ほどきを含めることが、ますます重要になってきています。共同体生活においてこれほど根本的なつとめを託すことが、時折、間に合わせ的に、適切でなく欠陥だらけの方法で実行に移されています。

## 「生身の人間」としての関係

### 「男女間の相互関係」

17. わたしたちは、生活の様式、組織や統治の構造、言語、全体的イメージなど、男性と女性の間、その同等の尊厳を傷つけて、深い差違を浮き彫りにする考え方を（遺伝子のように）受け継いでいます。教会においても、社会においてだけでなく、多岐にわたる一方的な偏見が、真の「女性の天分」<sup>25</sup>の賜物と、女性による独特の貢献を認識することから妨げてきました。この種の過小評価は、とりわけ、生活や司牧、教会の使命の片隅に置いておかれた奉献された女性たちを傷つけました<sup>26</sup>。公会議後の刷新は、女性の役割に対する増大する評価の浮上と拡散を見ました。20 世紀は「女性の世紀」とされ、とりわけ現代文化における女性意識の覚醒によって、50 年前に聖ヨハネ 23 世により、最も顕著な「時代のしるし」<sup>27</sup>の一つとして認められました。

これらにもかかわらず、この新しい感覚に対して抵抗する態度が教会共同体にお

---

<sup>24</sup> 「同上」、nn. 70～71 参照。

<sup>25</sup> 「同上」、n. 58 参照。

<sup>26</sup> 「同上」、n. 57 参照。

<sup>27</sup> 教皇ヨハネ 23 世、回勅：「パーチェム・イン・テリ：地上の平和」、1963 年 4 月 11 日、n. 22 [伊語版]。

いて、そして時には、奉献された女性たち自身の間にも長い間存在してきました。近年、女性に、自らの尊厳についてのこの自覚を促す特別な励ましが、同じ教導職から与えられました。特に功績を認められるのは、教皇パウロ6世、教皇ヨハネ・パウロ2世、教皇ベネディクト16世で、このテーマに関して貴重な教えを述べています。今日、多くの奉献された女性たちが、思考の枠組みや社会・政治・宗教組織における、型にはまった男性中心主義が刻み込まれた社会に対して、「生身の人間性」の聖書的理解の発展を助ける積極的な考察を提供しています。奉献された女性は、さまざまな世界状況において不正や抑圧の下に置かれる女性たちの苦しみに、連帯感を持って寄り添います。彼女たちのうちのあるものは、聖書の啓示を女性の目で再解釈し、新しい視野と新しい様式を見出し、創造的に「女性らしさという富」<sup>28</sup> を生きるための貴重な貢献をしました。信仰と教会への情熱に照らされたこの知性的作業の目的は、人間理解に基づいた維持可能性のモデルとなるために、教会内での兄弟・姉妹性を促進することです。

18. ここまで進んできた歩みにもかかわらず、まだバランスのとれた総括と、過去から受け継いだ枠組みやモデルの浄化に至っていないことを認識する必要があります。「さまざまな分野と意志決定の過程をも含むすべての段階において、とりわけ女性自身に関する事柄において、女性が参加する場」<sup>29</sup> が女性に与えられる機会を検証するとき、教会において、また奉献生活の具体的運営において、その構造にはまだ障害が存続していて、少なからぬ問題点が残っています。姿を現す若い女性の召命は、彼女自身に、自然に生じる女性としての意識を携えています。残念ながら、これは常に一つの価値として認められるわけでも、受け入れられるわけでもありません。ある種の不賛成を明示する批評が、他の奉献された女性からだけでなく、男性中心主義的で聖職者中心的な範型で考え続ける、教会内の何人かの男性からも寄せられます。教会は「預言者的に宣べ伝え [...] 主のみ旨に沿うように思いと行いを向ける」<sup>30</sup> べきだという、キリストから受けた解放のメッセージから、わたしたちはまだ遠くにあります。聖ヨハネ・パウロ2世が強く述べ、教皇フランシスコもしばしば繰り返すように、「奉献された女性たちが、教会の意識においても日常生活においても、彼女らの独自性、能力、そして使命と責任が、より明確に認識されるよう期待するのは当然です」<sup>31</sup>。

---

<sup>28</sup> 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的書簡：「女性の尊厳と使命」、1988年8月15日、n. 10。

<sup>29</sup> 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的書簡：「奉献生活」、1996年3月25日、n. 58。

<sup>30</sup> 「同上」、n. 57。

<sup>31</sup> 「同上」。

奉獻生活の領域では、男性と女性との相互関係における真の成熟が欠けています。若い人々には独自性と相違性との間の健全なバランスに達するため、さらに、年配者にも、尊敬と冷静さに満ちた相互関係の可能性を認識するのを助ける目的で、適切な教育が急がれています。年配の修道者と若い人々との間にある、認知上のずれも語るすることができます。ある人たちにとって、女性と男性との関係は大いに自制すべきで、嫌悪感までもよおす事柄ですが、他の人々にとっては、開放性、自発性、自然さに特徴づけられています。

特記に値するもう一つの側面は、真の統合の人間学的・文化的過程及び、女性らしさと男性らしさの要素と感受性による相互の補完性に関して、修道会の「内部」に見られる脆弱さです。聖ヨハネ・パウロ2世は、奉獻された女性が「さまざまな分野 [...] すべての段階において [...] 参加する場」<sup>32</sup>を得る願望を正当なものとして認めましたが、実際の実践において、わたしたちはまだ遠くにあります。教会自体を大きく疲弊させる危険が介在するとき、教皇フランシスコが述べたように、「女性たちの教会における仕事を減らすのではなくて、教会共同体における彼女たちの積極的な役割を促進しましょう。もし、教会がその総計と実質の次元で、女性たちを失ったならば、教会は不毛なものとなる危険があります」<sup>33</sup>。

#### 「権威者のつとめ」

19. 権威者のつとめは、奉獻生活において進行中の危機に無関係なものとして留まるものではありません。いくつかの状況を一見したところ、支部修道院のレベルにおいても、上位のレベルにおいても、然るべき下位決定の原理を飛び越えて、権限を行使する中央集権的な傾向がまだ目立ちます。いくつかの場合には、顧問たちの協力をほとんど無益にしてしまうほど、自己の良心に従って（独自に）決定してしまうほど、自信に満ちて自己の権限を行使してしまう上長の個人的性格に、強情の疑いが起こります。これについて、統治の実践における弱く、あるいは無用な共同責任制、あるいは場合によって、適切な委任の不在が言えます。統治は、教会法の禁令をかいくぐって、同一人物の手に集中させることができません<sup>34</sup>。いまだにさ

---

<sup>32</sup> 「同上」、n. 58。

<sup>33</sup> 教皇フランシスコ、「講話」、ブラジル司教団との会合において、リオ・デ・ジャネイロ、2013年7月27日。

<sup>34</sup> 教会法 第636条参照。

まざまな修道会において、集会議の決定に然るべき敬意を払わない上長の男女があります。

多くの場合、会全体、管区、そして支部のレベルが混同されており、各レベルに固有の下位決定権に応じた自立が保証されていません。そのような状況では、正当な自治の余地を認める共同責任感は培われません。上長たちが「現状」、つまり「いつもこうやってきた」ことの維持だけを心配する現象も記録されています。(共同体の)「目標や構造、宣教の様式や方法を見直すことに対して、大胆かつ創造的であってください」<sup>35</sup> との教皇フランシスコの勧めは、統治の構造や実践に同様にあてはまります。

20. 重大な問題を前に、説得や納得、正しく誠実な情報、そして反対意見への説明をなおざりにして、権威者からあらかじめ形成された多数意見に頼るのは、確かに賢明なやり方ではありません。さらに受け入れられないのは、同盟勢力の論理に依拠する統治の実践であり、修道会のカリスマに基づく交わりを破壊し、帰属意識に大きな影響を与える偏見を助長するのは、さらにひどいものだと言えます。聖ヨハネ・パウロ2世は、全員の効果的な参加を促進し、確かなものとする交わりの霊性を正しく実践していくために、修道生活の伝統的な古くからの知恵を躊躇せず思い起こさせてくれます。「しばしば、より若い者に、主はより良い考えをお授けになります」(『聖ベネディクトの会則』、III, 3)<sup>36</sup>。

どのような権威者であっても、たとえ創立者の場合であっても、カリスマの排他的解釈者であるとか、ましてや教会の一般法の規定を守ることから免じられていると思込むことはできません。このような態度は、修道家族や関係する共同体などの他の教会構成員における不信感を醸成したり、表明させるかもしれません<sup>37</sup>。

近年において、特に最近創設された修道会において、人間の自由と尊厳を操る話や状況に欠けることはありませんでした。人の尊厳や基本的人権まで傷つけて、全面的な依存状況にさせるだけでなく、さまざまな欺瞞や、カリスマを通じた、神のご計画への忠誠を利用して、倫理的分野や性的関係にまで至る屈従に誘導したのです。事実が明るみに出されるとき、すべての人に大きなつまずきとなります。

21. 権威者の日常の任務において、配下の人に、毎日の通常の活動への許可を絶

---

<sup>35</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勧告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 33。

<sup>36</sup> 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告：「新千年期の初めに」、2001年1月6日、n. 45；奉獻・使徒的生活会省、訓令：「キリストからの再出発：第三の千年期における奉獻生活の刷新」、2002年5月19日、n. 14 参照。

<sup>37</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008年5月11日、n. 13 以下参照。

えず求める負担をかけないことができます。権限を行使する者は、無責任な行動に誘導しがちな、幼兒的態度を助長すべきではありません。このようなやり方では、なかなか人々を成熟に導けません。

残念ながら、この類いの状況は、わたしたちの多くが認めて告発するよりも一般的で、特に女性の修道会においては、より顕著です。これは多数の退会者を出す原因の一つのように思われます。ある者にとっては、耐え難いものとなった状況への唯一の解決策となっています。

すべての退会の願いは、共同体全体、とりわけ上長たちの責任について、真剣に自問する機会となるべきです。権威主義は奉獻生活者の活力と誠実さを損なうものであることを、明白に述べなければなりません！ 教会法典は大いなる勇気を持って断言します。「各会に固有の兄弟的生活 [...] は、すべての者にとり、自己の召命を全うするため相互援助となるようになされなければならない」<sup>38</sup>。

それゆえ、傾聴する忍耐や理解のある受け入れなしに自己の奉仕職を行使する者は、自分の兄弟・姉妹たちに対して、自分を信頼性の乏しい者にしています。事実、「修道者上長の権威は、仕えられるためではなく仕えるために来たキリストの精神によって特徴づけられるべきです」<sup>39</sup>。それは、弟子たちがご自分の生命と愛に与るために、弟子たちの足を洗った、僕・イエスに着想を得た姿勢です<sup>40</sup>。

## 「関係的モデル」

22. 福音書でイエスが語った「新しい革袋」についての解説では、「革袋」を取り替えることは無意識に行われるのではなく、係り合いと能力、そして変化への対応能力を必要とすることが言われています。これが起こるためには、如何なる形での特権をも放棄する、広い心での対応能力を必要とします。どのような者も、また権威職に立てられた者はとりわけ、時代遅れで有害となった一連の枠組みの放棄から免れられないことを、時折思い出さなければなりません。老朽化した枠組みを放棄することなしには、どのような変化も可能ではありません<sup>41</sup>。それは新しい視野と可能性が、統治、共同生活、財の管理、そして宣教において開かれるためです。様

<sup>38</sup> 教会法 第 602 条；第 2 バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 15 参照。

<sup>39</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008 年 5 月 11 日、n. 14b 参照。

<sup>40</sup> 「同上」、n. 12。

<sup>41</sup> 第 2 バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 3。

式と態度の真正な再評価によりも、保存するための気配がある態度において、決してぐずぐずしてはいられません。

この手詰まりの状況をよく示す兆候は、共同体や修道会の統治部における、決定権の執拗な集中や交替の欠如です。

いくつかの女性修道会において、特定の人物に要職を永続させているのが検証されることを、わたしたちは福音的な率直さをもって認めなければなりません。幾人かの人物は、様々な職務に移ってはいるのですが、あまりにも長い年月、統治職に留まります。前の総統治職にあった会員を要職に任用するという、この広まった実践による中長期の影響を弱めるために、それについての一般規範を設けることによって対策を講じるのが適当でしょう。言い換えるならば、法規上の満了期限を超えた職務保持を妨げ得るのは、抜け道を見つける手だてに訴えるのを実際的に許さない規範です。

23. わたしたちが隠すことのできないもう一つの点は、この何十年かの間に、奉獻生活の聖職者化が激化したことです。その最も顕著な現象は、男性信徒修道会の人員的な危機です<sup>42</sup>。もう一つ別の現象は、司祭修道者がほとんど専一的に教区生活に没頭し、共同体生活にはあまり関わらず、それが共同体生活を弱めていることです。

とりわけ、司牧職を受けた際の修道者司祭の姿と役割についての神学的・教会論的な考察は、まだ進行中です。

さらに、適切な識別や必要な検証なしに、司教から好意的に受け入れられた修道者司祭の現象についても取り組むべきでしょう。反対に、教区の神学校や他の修道会から追放された神学生を、適切な識別なしに安易に受け入れてしまういくつかの修道会も、同様に監視しなければなりません<sup>43</sup>。これらの三点は、当該の人物や共同体にとってより重大な問題が起こるのを避けるためからも、決して割愛されることができません。

24. 従順と権威者のつとめは、高度に敏感な問題として留まっており、それは、文化や様式が深く、前例のないほどの変容を遂げたため、いくつかの側面では少なくともある人々に、おそらく当惑までさせています。わたしたちが生きている状況下では、「上長」と「服属者」の用語自体がもはや適切ではありません。かつてのピ

---

<sup>42</sup> 奉獻・使徒的生活会省、「教会における男性信徒修道者の独自性と使命」、バチカン出版局、2013年。

<sup>43</sup> 聖職者省、「司祭への召命の賜物：司祭養成綱領」、2016年12月8日参照。

ラミッド型で権威的な関係状況において機能したことは、教会が望み、またわたしたちがやろうとする交わりの感受性において、もはや望ましいものでも生きられるものでもありません。イエスの従順に言及するのでなければ行い得ないのと同様に、真の従順は、権威者側も従順する者も、神への従順を第一に置かなければ行い得ないことを、心に留めておかなければなりません。その従順は、「わたしの神、わたしの神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27・46）という愛の叫びと、御父の愛による沈黙を含むものです。

教皇フランシスコは熱心に招いています。「世界のすべてのキリスト教共同体に対し、特別にお願いしたいと思います。魅力と光とを放つ、兄弟としての交わりのあかしとなってください。互いに世話をし合い、互いに励まし合い、同伴する者として、すべての人がたたえられますように」<sup>44</sup>。

したがって、真の従順は、たとえ自己の確信が上長から求められたことと一致しない場合であっても、それぞれが識別において考え抜いた自己の確信を表明することを除外せず、それどころかそれを求めるものなのです。その上で、ある兄弟または姉妹が、より良いと思っても、交わりの名において自発的意志から従順するならば、そのとき「愛徳に満ちた従順」<sup>45</sup>を実践しているのです。

かなり見られることですが、上長と服属者の関係において、兄弟性という福音的基礎に欠けていることがまれではありません。修道会を構成している人間よりも、修道会により大きな重要性が与えられています。本省の経験からすれば、以下の事柄が召命を放棄する主要な動機として明らかになるのは偶然ではありません。それは、信仰理解の弱体化、兄弟的生活における争い、そして人間性に乏しい兄弟共同体生活です。

実際、上長たちが共同体を率いる方法は、「修道生活の刷新・適応に関する教令」の具体化として、「教会法典」にうまく描写されています。「上長は [...] 自己の権限を奉仕の精神で行使しなければならない。[...] 服属者を神の子として統治し、人格に対する尊敬の念をもって彼らの自発的な従順を推進し、[...] キリストにおける兄弟的共同体の建設に尽くし、すべてに超えて、神が求められ愛されるように努めなければならない」<sup>46</sup>。

## 25. 新しく創られた会における上長と創立者との関係は、特記するに値します。

<sup>44</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勧告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 99。

<sup>45</sup> アシジの聖フランシスコ、「訓戒の言葉」、III, 6 参照。

<sup>46</sup> 教会法 第 618 条、第 619 条；第 2 バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 14 参照。

教会生命を生き生きとしたものにする多くのカリスマに対して聖霊に感謝しなければなりません、しばしば危険なものになり得る狭量な従順の概念が書き記されるのを前にして、わたしたちは当惑を禁じ得ません。いくつかの場合、推進している協力が、「積極的で責任のある従順」<sup>47</sup>ではなく、幼兒的な隷属や小心翼翼とした依存関係となっています。このようにして人格の尊厳を辱めるまでに傷つけています。

外的分野（外的法廷）と内的分野（内的法廷）との区別が、これらの新しい経験や他の文脈において、必ずしも正しく考察され、適切に尊重されているとは限りません<sup>48</sup>。ここに述べた区別を安全に担保することは、内的自由に欠けた状況や、良心をある程度支配し得る、心理的服従の状況を生み出す不穏当な介入を避けます。これらでは、他の場合と同様に、会員たちを最悪の場合、心理学的暴力となる隷属状態の形を取り得る、過度の従属に追い込まないことが大切です。この分野では、上長の役割を創立者のものと分離することが必要となってきます。

26. 独創性を認めたり、責任を任せることや、心からの兄弟的關係に余地を与えない平均化された共同体生活からは、真の生活における分かち合いは、わずかしか生じません。このような関係となる危険は、兄弟共同体のつながりを変質させる、財の福音的交わりを生きる具体的な様相に、とても明白になります。教皇フランシスコは警告しています。「現在の金融危機は、その根源に深刻な人間性の危機、つまり人間性優位の否定があることを忘れさせてしまいます！」<sup>49</sup>。

奉獻生活は、その長い歴史において、経済的支配力が人々、とりわけ最も貧しい人々を辱める危険にさらす都度に、預言者的に立ち向かうことができました。現今の金融財政危機の世界情勢において教皇フランシスコは、奉獻生活者たちが内部における共同生活や、外部の、とりわけ貧しい者や最も弱い者たちとの連帯によって、預言的あかしを減じることのないために、本当に忠実で創造的であるよう召されていることに、わたしたちの注意を絶えず促しています。

わたしたちは家計簿的な経済から、ほとんどわたしたちの監督の目が届かない、管理的で経営的な処理方法へと移行しました。それは、わたしたちの心もとなさと、それにも増して、わたしたちの用意不足を明らかにします。共同体内部での、財の現実的交わりとわたしたちの傍らに生きる人々との、その具体的な分かち合いの真正な福音的感覚を取り戻すための最初の歩みとして、経済的及び財政的な事柄

<sup>47</sup> 第2バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 14。

<sup>48</sup> この事柄に関して、教会法 第 630 条は特別な注意を払っています。

<sup>49</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勸告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 55。

において、透明性を再び中心に据えるのを遅らせることはできません。

27. 共同体内での財の分配は、常に正義と共同責任を考慮して行わなければなりません。「権威者は人格の尊厳を促進するよう招かれている」<sup>50</sup> にもかかわらず、いくつかの場合、兄弟共同体生活に不可欠の基本を裏切る、ほとんど専制政治のようなものが検証されます。役割とつとめの多様性を認知しながらも、相互の帰属意識と公平さの保証をむしばんで、わずかな者の経済的自立が残りの者の従属に相応するような運営様式は受け容れられません。

個々の奉獻生活者の生活様式を定める法規は、評価と活動、そして教会と神の民の間における意味ある証しとしての修道会の清貧について、真剣で慎重な識別を免れません。

28. 奉獻された男女は、所有よりも存在すること、経済よりも倫理を優先する認識に基づき、彼らの活動の原動力として、少数による資源の排他的管理を避けながら、連帯や分かち合いの倫理を身につけるべきです。

修道会の運営は、教会としての数値の表現とは異質の、閉じた回路のようではありません。修道会の財産は教会財であり、人間の社会的地位の向上、宣教、神への愛、及び神の民との連帯に基づく分かち合いという、同じ目的に与っています。特に共通の義務として生きられる、貧しい人々への配慮と世話は、修道会に新たな活力を与えることができます。

この連帯は、各修道会、各兄弟共同体の中で確かに生きられて、他の修道会にも広げられます。「すべての奉獻された者たちへの使徒的書簡」において、教皇フランシスコは「様々な修道会の会員間での交わり」<sup>51</sup> に招いています。経済の分野において、とりわけ困窮した状況にある修道会と、自分たちの資源を分かち合う効果的な交わりを、なぜ考えないのでしょうか？<sup>52</sup> そのようであるなら、それは奉獻生活の内部における交わりの美しいあかし、「新しい専制政治が、しばしば仮想的に成立し、その法と規則とを容赦なく一方的に押しつけ」<sup>53</sup>、「際限のない」<sup>54</sup> 権力と所有の専制政治の下にあるわたしたちのこの社会において、預言者的しるしとなったでし

---

<sup>50</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008年5月11日、n. 13c。

<sup>51</sup> 教皇フランシスコ、使徒的書簡：「奉獻生活者年にあたり、すべての奉獻された者たちへ」、2014年11月21日、II, 3。

<sup>52</sup> 奉獻・使徒的生活会省、回状：「奉獻・使徒的生活会における財産運営のための指針」、2014年8月2日、2. 3. 参照。

<sup>53</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勧告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 56 参照。

<sup>54</sup> 「同上」。

よう。



### 第三部 新しい革袋を準備すること

29. イエスは、福音のメッセージの新しさを単なる反復による「慣習」そのものに貶める危険とつながる、古い慣習に連れ戻す傾向について、自分の弟子たちに何度も注意しました。「新しい革袋」に入れられるべき「新しいぶどう酒」の「たとえ」とともに、わたしたちは真の幸いの論理に身を委ねるよう招かれています。山上の垂訓はすべての弟子の歩みにとっての「マグナカルタ」(大憲章)です。「あなた方も聞いているとおり、[...]しかし、わたしはあなた方に言うておく」(マタイ 5: 21. 33. 38. 43)。これが歩いていく方向であるので、主は律法主義に逆戻りするあらゆる危険に注意を喚起しました。「十分気をつけなさい [...]」(マルコ 8・15、マタイ 16・11、ルカ 12・15)。

イエスのことばと行為の全体は、「御国の新しさ」へ無限に開く過程へと絶え間なく急ぎ立てます。この開きの最初の一步は、奉仕への用意を持つことに表される、神への忠実さの本質的な価値と対立するものすべてを識別し、拒絶することです。

「しかし、あなた方の間では、そうであってはならない」(マルコ 10・43 参照)。イエス・キリストの生涯は、福音によって提起された新しい論理と新しい優先性に敏感であるようにと召された彼の弟子たちの「新しい生活」が根付く、「新しい実践」の歴史です。

#### 聖霊への忠実さ

30. この「指針」の第一部で紹介した、まだ進行中の課題の分析は、問題点を認め、すべての人の希望となる新しい小道を開くために、この福音的な出発点にわたしたちを導くはずで、ここに類推して応用することができます。「宣教を中心とした司牧では、『いつもこうしてきた』という安易な司牧基準を捨てなければなりません。皆さんぜひ、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すというこの課題に対して、大胆かつ創造的であってください」<sup>55</sup>。

それゆえ、これは福音的あかしの神聖性と奉獻生活のカリスマに向かう新たな「通り道」を発見することです。これは識別し、そして「悪意と邪のパン種」(1コ

---

<sup>55</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勧告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 33。

リント 5・8 参照) を浄化し、回復させる必要な過程に向かわせることです。この情熱的で骨の折れる過程における必然的な緊張と苦難が、新しい発展の合図となり得ます。実際、わたしたちはすでに新しい総括の出発点にいます。それは「心の中の言葉に表せない呻き」(ローマ 8・23, 26 参照) と、創造的な忠実さの忍耐強い実行によって生まれるものです<sup>56</sup>。

31. 教皇フランシスコによる、喜びに溢れた、偽善なしの福音的精神への毎日の促しは、素朴な人たちの信仰と、聖人たちの大胆さに見られる単純化へと駆り立てています。奉獻生活が、それを受肉した預言でありたいと願っている福音の独創性(マルコ 10・43)は、具体的な態度と選択を通して貫かれます。それは、奉仕の優位性(マルコ 10・43~45)、貧しい人々に向かう確固たる歩みや、最も小さい人々との連帯(ルカ 9・48)、どのような生活や苦しみの状況にある人々の尊厳をも推進すること(マタイ 25・40)、相互の信頼と、すべての人がすべての人と寛大に協働する実践としての権限委譲です。

32. 聖霊の訴えや歴史からの挑発に応え得るためには、次のことを思い起こすのが良いのです。「教会の使命の決定的な要素として、奉獻生活は教会の「まさに核心」に位置づけられます。[...] 要するに奉獻生活は、『キリスト教的召命の本質的性格を浮き彫りにし』、花嫁としての教会全体が、その花婿との一致に向かう努力を明らかにするからです」<sup>57</sup>。それゆえ、奉獻生活が神の民の歴史的歩みに暗示するしるしの本質は、特権的に福音的預言の系列に位置づけられます。この預言者的系列は、そのカリスマ的本質のしるしと実りであり、奉獻生活に創作力と独創性を可能にします。それは聖霊から来るしるしに対して、「そよ風に耳を傾ける」(列王上 19・12 参照) までの絶えざる協力心を求めます。この態度だけが、みことばの実り豊かさ(ヨハネ 4・35 参照)における新しい希望へのよみがえりに至るまで、恵みの神秘的な通行(ヨハネ 3・8 参照)の認識を可能にします。

33. 独自性は、そのすべての重要性と共に、いかなる固定的・理論上のデータでもなく、しかし成長のために共有される過程としてとらえられます。奉獻生活を特徴づける世代間の差違、文化への受容、多文化性や文化間性は、奉獻生活会を労苦の場から、真心とキリストへの愛における真の共同体的対話となる挑戦の場へと、ますます変えることができます。このようにしてのみ、各自は「すべての者にと

<sup>56</sup> 教皇ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告：「奉獻生活」、1996 年 3 月 25 日、n. 37 参照。

<sup>57</sup> 「同上」、n. 3。

り、自己の召命を全うするため」<sup>58</sup>の「共同体の設計」に関与し、責任があると感じます。

これらの必要性は、すべての者が活動的で兄弟的な忠実さを再提起する、新たな信頼の支えとなるような構造の修正を求めます。

## 養成モデルと養成担当者の養成

34. 近年、養成の分野は、方法、言語、発展性、価値、目的、段階における深い変革を見ました。教皇フランシスコは次のように再確認しました。「神の民において、その内部において、常に考える必要があります。[...] 管理者や経営者を養成する必要はなく、しかし司祭、兄弟、共に歩む同伴者を養成すべきです」<sup>59</sup>。さらに、「養成は、職人的なわざであり、警察のような仕事ではありません」<sup>60</sup>。

固有の「養成綱領」の採用は、修道会の大部分が新しい要請に応えるために行っています。しかしながら、言語、質、そして教育方法上の知識に著しい相違が目立っています。最近作成されたものであったとしても、他のものをコピーしたレシピにすぎないものは、その見直しを迫られています。それはまさに養成の問題が、奉獻生活の未来にとって根本的な側面だからです。

35. ことに「継続養成」は、教皇が総長たちとの有名な対談で強調したように、特別な配慮を必要としています。

a) 生涯養成は、奉獻生活の教会的独自性に従って方向付けられるべきです。新しい神学や教会の規範、あるいは自己の歴史や修道会のカリスマに関する新しい研究に適合するだけの問題ではありません。課題は、人類への奉仕のために、教会での自己の位置を強め、あるいは取り戻すことです。しばしばこの作業は、古典的な「第二の回心」と符合します。第二の回心は、中年や「危機」の状況に置かれたとき、あるいは病気や老齢による活動的生活からの引退のときなど、生涯の決定的な時に課されます<sup>61</sup>。

b) わたしたちのすべては、養成が全生涯にわたるべきであると確信していま

---

<sup>58</sup> 教会法 第 602 条。

<sup>59</sup> 教皇フランシスコ、「世界を目覚めさせよ！教皇フランシスコと総長たちとの対談」：*La Civiltà Cattolica*, 165 [2014 / I], 11。

<sup>60</sup> 「同上」、10。

<sup>61</sup> 教皇ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告：「奉獻生活」、1996 年 3 月 25 日、n. 70 参照。

す。にもかかわらず、生涯養成の文化といったものが、まだ存在していないことを認めなければなりません。この欠乏は、生涯養成に関する偏っていて変質させられた考え方の結末であり、それゆえ、その重要性への感受性が乏しく、個人の関与は極めてわずかです。教育法的実践のレベルで、わたしたちは、個人的また共同体的形での具体的道筋をまだ見いだしていません。それは具体的な生活において、優れて長持ちすることになる創造的な忠実さをもって、成長への実際の歩みをもたらすはずです。

c) わけても、養成が真に生涯のものとなるのは、通常のものとなり、毎日の現実の中で遂行される時だけだという理念にいたるのが困難です。生涯養成のための、説得力の無い、あるいは社会学的な解釈がまだ残っています。それは現代化の単純な義務に結びついたものか、または霊的回復のための臨時の必要で、傾聴や訴え、問題提起や展望の分かち合いの継続的な態度とは結びついていないものです。各人は、生活や歴史、告げていることや執行していること、貧しい人や排斥された人、近隣の者や遠くにある者から、触れられ、教えられ、挑発され、照らされるままになるよう求められています。

d) 初期養成の役割も明らかにされるべきです。初期養成は、従順さや健全な慣習、集団の伝統に向けて教育するだけで満足することはできず、若い奉献者を真に「学びに熱心な者」とならせなければなりません。これは、キリストのやり方において、すべての者への奉仕に就くために、全生涯にわたり、毎日の出来事から学ぶ自由な心を築き上げることを意味します。

e) 特に、またこのテーマに関して、生涯養成の構造の次元をも考察することが不可欠となります。トレント公会議後の時代に、初期養成のために神学校や修練期が生まれたように、今日、わたしたちはそれぞれの奉献された者が、御子の抱いておられた思い（フィリピ 2・5 参照）に、ますます同形化する歩みの支えとなる形態や構造を実現するよう呼ばれています。それは極度に雄弁な制度的しるしとなるでしょう。

36. 上長たちは、奉献された者たちに、個人としてまた共同体としての歩みに関する問題のすべてにおいて、彼らの近くにあるよう求められています。誠実で建設的な対話をもって、養成の途上にある者たちや、様々な理由でこの行程に再度入る者たちに同伴するのは、上長たちの特別な任務です。浮かび上がった諸問題は、各人が共同責任を感じ、同時に、兄弟共同体の建設に不可欠なものとして認められるために、人間性を高める福音的な要素がバランスを保てるような、兄弟的生活を促進することを課しています。事実、兄弟共同体は継続養成の優れた場なのです。

37. 新しい専門性も多文化性の環境における養成担当者の養成に、適宜準備されるべきです。「よい機構は有用なものですが、それだけでは不十分です」<sup>62</sup>。志願者の養成に向けた諸管区合同のものや国際的機構は、「キリスト教はただ一つの文化様式をもつものではありません。むしろ、『福音の告知と教会の伝統に全面的に忠実でありながら自己を完全に保つことによって、キリスト教はまた、多くの文化や民族の顔をもつようになる』」<sup>63</sup> ことを、養成担当者が本当に確信するのをもたらしめます。これは、ある文化体系を押しつけない能力や謙虚さをもたらし、「固有の文化のむなしい神聖化」<sup>64</sup> を注意深く避けながら、それぞれの文化を福音の種子と固有のカリスマ的伝統によって豊かにします。

新しい知見と能力の相乗作用は、多文化の格別な文脈において、養成における同伴に役立てることが出来ます。それは、養成の旅路又はその後、早晩再浮上して、修道会への帰属意識や「キリストに従う」ことへの召命に堅忍する上に否定的な大きな傷を与える、型にはめ込まれた同化や標準化を乗り越えるためです。

## 福音的關係性に向かって

### 「相互性と多文化での作用」

38. 女性の奉獻生活について考察することは、現代の複雑さを考慮に入れながら、修道会及び奉獻された女性を個々に、また共同体として、具体的に問題にすることを意味します。心に留めなければならないのは、近年、特に「女性の尊厳と使命」(1988年)において教導職は、修道会の体験において明白に(あるいは時として潜在的に)影響を与える、女性の独自性についての、文化や教会での一連の作用について、敬意を込めた見方を促し、また同伴しています。

特に文化の多様性は、自己の存在を特定の文化に根付かせることと、常に豊かになる福音の息吹で限界を超えていく能力の、二重の歩みを義務づけます。修道誓願によって奉獻された者は、その特定の文化的帰属と福音的生活へのあこがれとの仲介に生きることを選択します。それは必然的に奉獻された者の視野を広げ、彼の感

<sup>62</sup> 教皇ベネディクト 16 世、回勅：「希望による救い」、2007 年 11 月 30 日、n. 25。

<sup>63</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勸告：「福音の喜び」、2013 年 11 月 24 日、n. 116。

<sup>64</sup> 「同上」、n. 117。

受性を深めます。文化の多様性を口実とした自己中心主義に支配されることなく、この仲介の機能を調べるのが急務となっています。

この理解において、その構成要素において、女性の世界から浮かび上がった事例を集め、それを男性のものと結び合わせて、奉献生活の神学を再考察する必要性が明らかとなります。特殊性の強調は、共通の人間性に属することを取り去るものではありません。それゆえ、神学の分野だけでなく、多岐にわたる人文科学のものとの学際的研究を取り戻すことが適切となります。

39. 特に女性修道会における近年のあわただしい国際化に、緊急に焦点を合わせた注意が求められています。しばしばその解決策は、その場しのぎで、賢明に段階を踏まないものであったりします。特記しなければならないのは、地理上の膨張が、本物の文化受容と統合を可能にする、様式や機構、思考の枠組みや文化的知識の適切な見直しに伴われなかったことです。教皇庁からの教導にも指摘されたように、特に教会や社会において、女性の考え方の評価に関する刷新が欠如しています。不十分な意識化、より悪くは、女性の問題の捨象は、女性の新しい世代への大きな損害を伴った、否定的な逆戻りを被りました。実際に、多くの女性が「キリストに従う」ことに手引きされ、養成されるために修道会に身を委ねたのですが、とりわけ、福音的自由における奉仕よりも、「奴隷」のような役割を担わされて、古くて廃れたものとなった振る舞いを身につけるよう強いられているのに気づきます。

40. 国際化の作用は、(男女の)すべての修道会に、様々な感受性や文化が、他の所では認識されていない力と意義を獲得できる、思いやりのあるもてなしの実験室となるよう、したがって高度に預言的なものとなるよう、義務づけているはずで、この思いやりのあるもてなしは、文化間の真の対話によって構成されます。それは、すべての者が自己の個別性を放棄することなしに、福音へと回心するためです。奉献生活が目指す目標は、それが出会う様々な文化における、永続する身分として持続することではなく、異文化間の人間の現実を前向きに構築する心による福音的回心を、永続的に持続することにあります。

時折、女性の独自性についての貧弱で、また異文化との接触による文化変容をしていない人間学的・霊的な理解が、奉献生活に現存する「仲間」の活力を失わせたり、傷つけたりしています。奉献された女性の独自性に適した共同体モデルを奨励するためには、まだ成し遂げられなければならない多くの仕事があります。この観点から、上長たちと姉妹たちとの間で、話し合いと姉妹性の関係構造を強化すべきです。どの姉妹も隷属状態に追いやられるべきではありません。残念ながら、こ

れはしばしば見られることです。この状態は危険な小児性を助長してしまい、人格の総合的な成熟を阻害し得ます。

(様々な段階における) 権威職を務めたり、(様々な段階における) 財産の管理の任務を持つ奉獻された女性と、彼女たちに従属する姉妹たちとの間の相違が、不平等と権力主義のために、苦しみの源泉とならないよう警戒すべきです。後者が、最も初歩的な決定や、個人的及び共同体の資産の運営からも取り残されている間に、前者が成熟度や計画性を発展させるということが起こります。

#### 「権威者のつとめ：関係的モデル」

41. 公会議以来に仕上げられてきた奉獻生活についてのより広い理解においては、権威者の役割から兄弟共同体の活力へと中心が移っています。このため、権威者は、兄弟・姉妹たちが自覚と責任のある忠実さに向かって同伴するための真の奉仕として、交わりに仕える者でなければなりません。

事実、兄弟たちあるいは姉妹たちとの話し合いや、個々の人々に聞くことは、権威者のつとめが福音的となるために不可欠の場と変わります。経営的技術にたよることや、「神のみ旨」というような表現を、精神主義的で温情主義的に応用することは、他の人々の期待や日々の現実、共同体で経験され分かち合った諸価値を対処するために召されたつとめの価値を落とすものです。

42. 上長と従属者の関係においては、福音に役立たず、現状を維持する上での必要か、あるいは特に緊急な経済運営に応じるためでしかない、単なる従順の遂行を越える、共通の計画の責任ある共有が課題です。

この理解において、上長と従属者に関する現行の法律用語を再表現するための会憲の認可(書き直しや修正)の際に、本省がしばしば受け取る例が評価されるでしょう。「修道生活の刷新・適応に関する教令」は次のように明白に求めています。「生活・祈り・活動の様式は [...] 今日における会員の身体的・心理的な状況に、また各会の性質が求めるところに従って、使徒職の必要性、文化の要請、社会的・経済的な状況に合わせて適応されなければならない」<sup>65</sup>。

---

<sup>65</sup> 第2バチカン公会議、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、n. 3。

43. それゆえ、兄弟共同体の生活の仕方において、協働と共通の理解を呼びかける権威者のつとめが奨励されるべきです。本省は、公会議の歩みと同じく、折を見て、訓令：「権威者のつとめと従順」を發し、次のことを認めました。「このテーマは、特別な考察の作業を要します。とりわけ近年における会と共同体の内部において検証され、また奉獻生活の刷新に関する教導職からの最近の文書によって提起されたものの光の下で検証された変化のためです」<sup>66</sup>。

実際、公会議閉幕後 50 年を超えようとするときにあつて、権威主義の形態に退化してしまうまでに奉仕の精神から遠ざかり、あるいは矛盾する統治のやり方や実践の継続を、心配しないわけにはいきません。

44. 上長が持つ個人的権限の正当な優越性は<sup>67</sup>、いくつかの場合、教皇フランシスコが忠告するように、最悪の場合、主役を誤解した私的権威と取り違えられています。「キャリアを持ち、出世主義である男女が、人々や教会、自分が仕えるべき兄弟や姉妹を、自分の利益や個人的野望のための踏み台として利用して、神の民にもたらす損害について考えましょう。これらの人々は教会に大きな損害を与えています」<sup>68</sup>。それだけでなく、権威のつとめを行う者は、「個人的な自己満足の誘惑に陥ることや、すべてが自分次第であると信じ込むこと」<sup>69</sup> にならないよう自戒しなければなりません。

45. 自己保身的な権威者は、兄弟たちや姉妹たちの間における責任の福音的論理を回避して、彼らを導くはずの信仰の確実性を弱めてしまいます<sup>70</sup>。このようにして、上長の役割の識別への必要条件である、信仰理解を損なう悪循環が始まります。そのような識別は、当該役職者の人間性を心に留めるだけに止まらず、それを超えたものにまで至ります。これは相互に、また本当に信頼することと、身を委ねることの問題です。

また争いやいさかいの状況においても、権威主義的な言葉を用いることは、無理解や分裂の悪循環を引き起こし、それは問題となった案件を全く超えて、修道会内に混迷と不信を醸成し、言い換えれば、修道会の直近の未来についての重苦しい束縛となります。権威者のつとめに召された者は、どのような状況においても、責任

---

<sup>66</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008年5月11日、n. 3。

<sup>67</sup> 教会法 第 618 条参照。

<sup>68</sup> 教皇フランシスコ、講話：「国際総長連合の総会出席者に」、ローマ、2013年5月8日、n. 2。

<sup>69</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008年5月11日、n. 25a。

<sup>70</sup> 教皇パウロ 6 世、使徒的勸告：「福音のあかし」、1971年6月29日、n. 25 参照。

感に欠けることがあってはならず、なによりもまず、兄弟や姉妹たちに対するバランスのとれた固有の責任感を必要とします。「このすべては、『人格に対する尊敬の念をもって彼らの自発的な従順を推進し』（教会法 第 618 条）、対話を通して、同意は『キリストに従うために、信仰と愛の精神』（教会法 第 601 条）において起こるはずだということを考慮に入れた、兄弟たちの責任への信頼から可能となります」<sup>71</sup>。

46. 「一定の任期をもって就任した上長が、統治の職務に中断なしの長期にわたり従事することのないように」<sup>72</sup>。教会法典の規範は、まだ受容の段階にあり、修道会の実践においては、かなりのばらつきがあります。固有法に定められた期間を超えて、任期を延長するために慣習的に使われる理由は、当該地域共同体に特別に関係した、突発的な状況や、人材の欠乏に 대응するためです。特定の修道会固有の伝統の影響は、交代を事実上妨げる、ある種の気質を作り上げることに加担してきました。このようにして、「ローテーションによる奉仕」が、「守備位置の固定化」に変わることになってしまったのです。このような観点から、固有法に定められる規範は、不適當なものであれば見直され、方針が明らかであれば遵守されなければなりません。

上長交代の速度低下を注意深く見ると、共同体の宗教的・使徒的活性化への必要よりも、業務運営上の継続性を確保する心配が多くあるように思われます。さらに、共同体の構成評価において、最新世代の兄弟や姉妹の存在は、世代交代の条件を設定します。交代の遅れは、後に埋めることのできない空洞を創り出すほどの、若い世代の能力や可能性への不信として理解され得ます。

47. わたしたちのすべては、教皇フランシスコがこの点に関して述べたことを思い起こさなければなりません。「奉獻生活には、若者と高齢者、遵守と預言との出会いが生きています。これを二つの対立するものと見ないようにしましょう！高齢者は若者に知恵を授けることが善く、若者はこの経験と知恵の財産を拾い集め、前進させ、それを博物館で保管するためではなく、それぞれの修道家族や教会全体の善のために、前に進ませるのです」<sup>73</sup>。

---

<sup>71</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「権威者のつとめと従順」、2008年5月11日、n. 14b。

<sup>72</sup> 教会法 第 624 条 2 項。

<sup>73</sup> 教皇フランシスコ、講話：「主の奉獻の祭日。第 18 回世界奉獻生活者の日にあたって」、ローマ、2014年2月2日。

## 「権威者のつとめ：集会議と顧問会」

48. この識別と刷新の継続する作業において、「地域別のものであれ会全体のものであれ、集会議（あるいは類似の集会）には特別な重みがかかります。その集会議とは、会憲が定めるところに従って上長を選出し、聖霊の照らしの下に、彼らのカリスマと霊的相続財産を、移り変わる歴史と文化の状況の中で保持し、適応するための最良の方法を識別するために招集されるものです」<sup>74</sup>。さらに集会議は、「会全体を代表し、愛における会の一致の真のしるしとなるよう形成されるべきです」<sup>75</sup>。

集会議の代議員についての考察は、その最も真正な見地、つまり愛における一致から始まります。集会議、とりわけ会全体のものへ、姉妹や兄弟たちを選出するための規則や手続きは、今日、多くの奉献生活会や使徒的生活会の様相を形成する、変化した文化的・世代的構成を無視することはできません。多文化的次元は、集会議の構成に、正当かつバランスのとれた仕方で表現されるべきです。

49. 規則や手続きが、不適切あるいは老朽化したものとなり、代議員の構成が不適切な文化的支配や、限られた世代的幹部の顔合わせとなる危険をもつ不均衡をもたらすとき、問題は明らかとなります。これらの「ねじれ」を避けるために、異なる文化的地域に属する姉妹・兄弟たちの代表を、徐々に多く総集会に送り込むことが必要です。これは信頼することの問題です。わたしたちの社会ではあまりにも若いとされる者でも、他の民族や文化的地域においては、彼らの能力についても、際だった責任を遂行するための要件を備えていることがあるからです。選出のための手続きは、希望がもて、生存可能な将来の建設を保護するのを目的として、より幅広く、先見の明のある代表を保証するための柔軟性を持たせるべきでしょう。

手続きの公正さや、方法を選択する上での扱いやすさだけが論じられているのではなく、「*テーズの会則*」が書いているように、「共同体の歩みのために、キリストの望みにできる限り多く光を当てること」と、神の計画を識別したいという願望によってのみ浄められた、探求の精神において行うことが重要なのです。

50. 集会議内でのすべての決定には、聖霊に開かれた、参集者各々の意志が伴われなければなりません。これは発言や観点の交換を軽視するのではなく、真理に収束する様々な探求の道です。このようにして、全会が一致するための努力とそれに

<sup>74</sup> 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告：「*奉献生活*」、1996年3月25日、n. 42。

<sup>75</sup> 教会法 第631条1項。

到達する可能性は、ユートピア的ゴールではなく、その反対に、傾聴と聖霊に対する共同の率直さの、最も明白な実りを表現するものです。

識別を、あたかも集会議が隠遁者の手仕事であるかのように、代議員たちの私的な範囲の中に追いやることは賢明ではないでしょう。これは「吹き抜ける聖霊に出会う」ことを問題としており、修道会における「わたしたちの現状に、神がわたしたちに語りかけておられることを聞く」ことを意味します。識別は「状況や問題性の描写に止まらず [...], 常にそれを越え、それぞれの顔や歴史、状況の内側に、機会や可能性を見ることに成功します」<sup>76</sup>。忘れてならないのは、総集会在聖霊に対する個人的に、また全会が一致して従順する場であるということです。この素直な傾聴は、祈りのうちに、知性と心と膝を屈めることを求められます。このような回心において、各代議員は、決定の際に良心において行動し、聖霊から受けた照らしのもとで、教会における修道会の善を判断します。この祈りにおける従順の態度は、総集会の歴史に常に結ばれており、総集会の開始日を聖霊降臨祭とすることに大きな理由があります。

51. 総集会の催しは、さらに総長の選挙を伴います。この何年かの間、請願選出の手段に訴える傾向が、ある程度見られます。この（請願選出の）制度は、「教会法典」の第180条～第183条によって規定されています。請願選出は、教会法上の選挙において介在する妨げであり、同一人物を継続して選出することや、共通法あるいは固有法に定められた、役職に付随する個人的要件からの適用除外を求めるもので、その例としては、年齢、初誓願からの年数<sup>77</sup>、役職の相対的な両立不能性<sup>78</sup>があります。最も多い例は、会憲によって定められた任期満了後、総長に再度選出する（又は復職させる）ことへの妨げに対してです。これらの案件は、複雑な背景のニュアンス（修道会）と人材的状况（既に役職に就いていた候補者たち）、そして、少なからぬ場合に、所轄聖省に請願選出を求めさせる状況を示しています。いくつかの指標が、これを明確にしています。

他の代替案が先験的に除外されているかのように、選挙の識別に際して、請願選出を当たり前と思わせる前置きは、あまり好ましいものではありません。請願選出のために要求される多数とは「少なくとも3分の2の賛成投票」<sup>79</sup>です。この教会法の規定は、請願選出に頼ることの適切さを前もって識別する作業を奨励するもの

---

<sup>76</sup> 教皇フランシスコ、講話：「ローマ教区大会にあたり」、2016年6月16日。

<sup>77</sup> 教会法 第623条参照。

<sup>78</sup> 教会法 第152条参照。

<sup>79</sup> 教会法 第181条1項。

です。団体的に行使される共同責任は、代わりとなる解決策を探る責任をも含みます。いくつかの修道会での実践では、非公式の予備的諮問の形態を導入しました。しかし、動向を提示して、予め多数派を形成してしまうのを避けるべきでしょう。そうでなければ、予期された請願選出に向かう歩みを短くするだけのものとなります。

52. 総集会は通常、総長<sup>80</sup>の他に、修道会の統治に協力する機関である顧問会を選出します。各顧問には、修道会の「共同体生活とその使命に [...] 自信を持って参加することが [...] 求められ」<sup>81</sup>、「たえず道を照らし導く主の現存を確かなものとするための」<sup>82</sup> 誠実さ<sup>83</sup>と公正の精神において、「対話や識別の実践を可能にするように参加」<sup>84</sup>します。

不可避的な困難や無理解は、もし適宜に対応しなければ、顧問会内での理解する意志と一致する能力を危うくするかも知れません。修道会における共通善の配慮において統治部に協力する機関は、長期的展望における識別の前置きを提供する（霊的、職業的、そして会特有の養成の）同伴をなおざりにしないで、固有の働きを配慮する義務を持ちます。実際、顧問会は、まずもって自己のイメージを気遣うべきではなく、とりわけ修道会統治部への協力機関としての、固有の信頼性を保つことを心がけるべきです。

53. 教会における奉獻生活の展開の新しい地図は、修道会の生活と統治部に新たな文化的バランスを描き直しています<sup>85</sup>。総集会の国際的構成は、いつも顧問会の多文化的輪郭をも表現しています。多くの奉獻生活会と使徒的生活会の経験は、既にこの点に関して、長い伝統を培ってきました。最近創設された修道会は、「様々な民や文化の要求のカトリック的一致における表現」<sup>86</sup>となるための、見習い期間の段階にあります。これは「浄化され、成熟する必要のある」<sup>87</sup>いろいろと要求の多い歩みです。

---

<sup>80</sup> 教会法 第 625 条 1 項参照。

<sup>81</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「キリストからの再出発：第三の千年期における奉獻生活の刷新」、2002年5月19日、n. 14。

<sup>82</sup> 「同上」。

<sup>83</sup> 教会法 第 127 条 3 項参照。

<sup>84</sup> 奉獻・使徒的生活会省、訓令：「キリストからの再出発：第三の千年期における奉獻生活の刷新」、2002年5月19日、n. 14。

<sup>85</sup> 「同上」、n. 17 参照。

<sup>86</sup> 教皇ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勸告：「奉獻生活」、1996年3月25日、n. 47。

<sup>87</sup> 教皇フランシスコ、使徒的勸告：「福音の喜び」、2013年11月24日、n. 69。

最近の国際化の推移は、責任ある職務、特に顧問の職務を引き受けることへの養成に関して、未来への準備のできていない、無防備な仕事場です。世代交代や文化的変動は、顧問たちの識別による内的活動を危うくし、結果として、修道会の良い統治を損ない得る状況に、弱みをさらけ出すべきではないでしょう。

問題となるいくつかの状況を紹介します。適性のある人物ですが、まだ十分に準備されていないか、あるいは時期尚早の候補者。個人的な経験や資格を評価されたことよりも、文化的割り当ての論理によって選ばれた修道者。少なからぬ場合に、代替者の欠乏に強いられた選択があります。

54. 他の文化や世代の兄弟姉妹が仲間入りすることは、顧問たちの伝統的役割を確かに変えるものではありません。しかし、役割の認識や顧問会の内部と外部での相互作用の様式に影響を与えます。他の観点（問題の分析／評価）をもたらすことは、修道会の現実を理解する視野を広げます。中央からよりも周辺部からの視野です。文化と世代の交代は、既にその複雑な組み合わせから、修道会での持続可能な将来に対処する、新しい飛躍を手助けするはずで

責任のある役職に就くことは経験に組み込まれます。もし、経験が日々の学習の過程であれば、その学習は具体的な養成によって支えられなければなりません。その反対の場合経験は、顧問の役職自体の効果と、顧問会の活動への統合という目的に十分に発揮されなくなります。この場合、現在における投資によって将来に備えるという、奉献生活会と使徒的生活会の統治伝統の間に成熟した方向性を、必然的な時代における検証とともに、再発見又は再考察することが問題とされます。直近の未来はこの視野を狭めることができません。新しい専門性（知識や資格）は、わたしたちの視野を広げるために貢献することができますが、とりわけ、やがては歩み全体を動かなくしてしまう、幅の狭い見方に囚われて、未来において疎外されたものとならないことに貢献します。



## 結び

奉献された男女は、公会議による現代化の何十年間に、惜しみなく大胆な関わり方で、主のぶどう畑において働いてきました。今は、ぶどうの収穫期であり、「新しいぶどう酒」の季節であり、喜びをもってぶどうを絞り、ふさわしい「革袋」に入念に集める季節です。それは沈殿のためではなく、新しい安定性に向かう成熟期に特有の発酵に余地を与えるためです。「新しいぶどう酒」と「新しい革袋」は、わたしたちの心構えとともに、聖霊と教会の責任者の導きのもとに、カリスマや教会内の状況にしたがった、わたしたちの協働によって実現されます。神から祝福された実りの純正な味わいを保つために、創造性のうちに新しさを守る時に至りました。

「新しいぶどう酒」は、聖霊によって高く上げられた新しさを評価し、それを感謝の念で受け入れ、一時的な段階を超えて完全な発酵に至るまでそれを守るために、受け継いだ様式を超え出て行く能力を必要とします。イエスが福音書の同じ箇所語る「新しい衣服」もまた、現代化のいろいろな局面を通して仕立て上げられ、そして今、信じる民の中であって、喜んでそれを着用する時です。

56. 「新しいぶどう酒」と「新しい革袋」、そして「新しい衣服」は、成熟と完成の時節を示しており、それを不賢明な並べ方や、戦術上の妥協によって危険にさらすことが許されません。「古いもの」と「新しいもの」は、混ぜ合わせるべきではありません。なぜなら、それぞれが固有の時節に属し、異なる時代とわざの実りであり、その固有の純粋性に保たれるべきだからです。

わたしたちの手のわざに実りをもたらし、現代化の歩みを導いてくださるぶどう畑の主人は、恐れることなく新たにされた福音的勢いとともに、わたしたちに委ねられた新しさを、適切な手段と忍耐強い警戒によって守ることを許してくださいませ。

57. 聖マリア、「新しいぶどう酒」の聖母よ、収穫と新しい時節の実りである「新しいぶどう酒」に、あなたの現存のしるしを認めながら、聖霊の新しさに向けて従順において進む願望を、わたしたちの内に守ってください。

わたしたちをあなたの恵みに対して素直に、またぶどうの果汁の発酵を包み込むことができ、無駄に失うことのない「革袋」の準備に、よく働く者とさせてください。聖霊がすべての新たな被造物に求める十字架の神秘において、わたしたちの歩みを確かなものとしてください。

毎日、彼の食卓につくために、あなたの御子キリストが、わたしたちになすよう

に命じられること（ヨハネ 2・5 参照）を教えてください。彼こそ、「新しいぶどう酒」であり、その方を通して、わたしたちは感謝し、祝福を受け、そして贈るのです。

ぶどうの木の新しい実りを、キリストとともに御父の御国で飲める日（マタイ 26・29 参照）を待つわたしたちのうちに、希望をかき立ててください。

2017年1月3日の謁見において、  
教皇様はこの指針の出版を認可されました。

バチカン市国、2017年1月6日

主の公現の祭日

枢機卿 ホアン・ブラス・デ・アヴィス  
長 官

＋ ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ、OFM  
大司教 官房長

---

新しいぶどう酒は新しい革袋に

2018年3月5日日本語訳発行

翻訳発行 フランシスコ会 日本管区本部

〒106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

電 話 (03)3403-8088

F A X (03)3401-3215

---